

クリント・イーストウッドの『硫黄島からの手紙』

——総指揮官と一兵卒の物語——

Clint Eastwood's *Letters from Iwo Jima*

——A story of the supreme commander and a private——

永井邦彦

Kunihiko NAGAI

(和歌山大学教育学部独語教室)

2012年10月17日受理

序

『父親たちの星条旗』において、監督であるクリント・イーストウッドは、硫黄島の戦闘によって、心に深い傷を負い、終生それに苦しんだアメリカの兵士を主人公にすえ、その息子が彼の死後に、生前には語られることのなかった硫黄島での体験を、戦争の関係者を訪問し調査する形で、明らかにしていく過程を映像化した。その際にこの映画は、戦闘の一方の当事者である日本軍については描写することなく、アメリカ兵たちの視点からのみ構成されている。

イーストウッドは、当初は『父親たちの星条旗』だけを監督するはずであったが、硫黄島においてアメリカ軍と戦った日本軍について綿密な調べを行なうほど、「私は島を防衛した栗林中将に引きつけられて、二作品を作ることになった」¹⁾と発言している。そして、今度は栗林忠道陸軍中將を主人公にした、日本軍のみを描く『硫黄島からの手紙』を制作した。

硫黄島の戦いを指揮した栗林忠道は、名将と称えられる。その理由はどこにあるのだろうか。

栗林に関して、多くの書籍において指摘されるのが、アメリカ軍と比較して、圧倒的に劣勢な軍勢力にもかかわらず、5日間で完了すると予想された硫黄島の戦闘を36日間も持ちこたえさせ、死傷者の総数において、アメリカ軍に日本軍を超える犠牲を払わせたことである。

例えば、『父親たちの星条旗』の原作者であるジェイムズ・ブラッドリーは、アメリカ軍が被った損害について、次のように記述している。

アメリカの若者たちは約21,000名の日本兵を殺したが、そうすることで26,000名以上の戦闘犠牲者(日本側の資料では約29,000人)を出した。進攻軍が防衛軍より多い戦闘犠牲者²⁾を出した、太平洋では唯一の戦闘だった。

海兵隊は、第二次世界大戦で43カ月間戦った。だが、硫黄島の1カ月間で全戦死者の3分の1が生じたのだった。³⁾

太平洋戦争の緒戦における連戦連勝とは打って変わって、日本軍はガダルカナル、タラワ、サイパンと次々に占領地をアメリカ軍に奪取され、日本兵たちは圧倒的な物量の優位を誇るアメリカ軍に対して、最後は万歳突撃を敢行し玉砕を重ねていた。

しかし硫黄島の日本軍は執拗に持ちこたえ、なかなか陥落しなかった。なぜこのようなことが起こり得たのか。防衛大学助教授であった武市銀次郎は、この点について以下のように説明している。

栗林中將の類いまれな合理的精神と鉄をも溶かすような指揮強制力の発揮によって、防御思想を伝統的な水際配備から後退配備に大きく転換させ、21,000余名の全将兵を地下洞窟に立て籠もらせてアングラ作戦を実行し、圧倒的な力を持つ米軍に出血持久作戦を挑み、当初米軍が5日間で占領する予定のところを36日間の長きにわたって戦い続けた。⁴⁾

ただし硫黄島の日本軍は栗林の指揮下で、一糸乱れることなく統率されていたのではなく、水際配備から後退配備への作戦変更には、海軍側の抵抗が大きく徹底されなかったこと、栗林の意に反した突撃が行なわれたことなど、混乱があったことも指摘されている。そして映画『硫黄島からの手紙』にも、これらの対立は反映している。

硫黄島の戦闘と栗林忠道に関する様々な文献を参照すると、それらから映画に採用されたであろうシーンがいくつも見つかる。『硫黄島からの手紙』の制作に際して、かなりの資料が参考にされたと推測されるが、映画には次のようにクレジットされている。

Based on "Picture Letters from Commander in Chief" by Tadamichi Kuribayashi. Edited by Thuyuko Yoshida. Published by Schogakukan-Bunko.

(吉田津由子・編『「玉砕総指揮官」の絵手紙』 小学館文庫)

『「玉砕総指揮官」の絵手紙』には、栗林がアメリカ留学中(1928年3月～1930年4月)に息子・太郎へ書いた絵手紙が大半を占めるが、硫黄島で書いた、娘「たこちゃんへ」(1944年6月～1945年1月)と「妻 子供達へ」(1944年6月～1945年2月)、そして大本営へ宛てられた「栗林中将訣別の電文」も収録されている。これらの手紙が映画の中で、栗林像を成立させるのに、重要な役割を果たしていることは、確かであるが、イーストウッドは、資料との関係を次のように述べている。

できるだけ歴史的事実に近づけようと努めた。受け売りの情報しかない中でね。硫黄島の兵士が語った話を基に——現場にいなかった人が書いたのが大半で——視点はさまざまだった。60年間思考を重ねた末に振り返ったものもあるね。だから自分の想像力が頼りだった。⁵⁾

制作に関して正確を期せば、脚本はアイリス・ヤマシタが担当しており、彼女が様々な資料を渉猟することで得た栗林像が、脚本に結実しているのであろうが、最終的に映画として完成させるのは、監督であるイーストウッドの想像力である。そして彼らの想像力は、架空の人物を創造したのである。

硫黄島の戦闘において、小笠原兵団総指揮官・栗林忠道と並んで、実在の人物として有名なのは、1932年のロサンゼルス・オリンピックにおいて、馬術で金メダルを獲得したバロン西こと、西竹一陸軍中佐である。『硫黄島からの手紙』において、西は栗林と協力して、重要な役割を果たす。しかしこの映画において、西中佐以上に重要な位置を占め、栗林と同等とも言える役割を担う人物が登場する。歴史的には架空の、西郷と呼ばれる一兵卒である。

本稿では、栗林と並んで、西郷を考察の対象とする。

I

『硫黄島からの手紙』は、次のように始まる。

真っ暗な空に幾つかの星が光るような映像。それが海岸の黒い砂とその光の反射であることがわかる。カメラが引くと、海岸の前方には摺鉢山が映し出される。続いて「硫黄島2005年」とキャプションが出る。摺鉢山の頂の硫黄島戦没者顕彰碑が大きく映し出され、そこからカメラは俯瞰となり、島内のトーチカや戦車などの戦争の残骸を映し出す。硫黄島協会の調査団が地下壕へ入っていき、何かを掘りあてる。「気をつけて」という声とともに、時間が遡り、「硫黄島1944年⁶⁾」のキャプションが出て、調査団がシャベルで発掘するシ

ーンが、硫黄島の海岸で塹壕を掘る兵士たちの映像にオーバーラップして繋がる。

そのうちの一人の兵士がクローズアップされ、そのボイス・オーバー(内的独白)で本編が始まる。彼が西郷である。

花子、おれたちは掘っている。一日中掘り続ける。ここで戦い、ここで死ぬことになる穴。花子、おれ、墓穴を掘ってんのかな。

硫黄島上空に飛行機が飛来し、西郷たちが見上げる。機内が映し出され、栗林陸軍中將の登場となる。栗林のボイス・オーバーが聞こえてくる。

本日付で私は自分の兵が待つ任地に向かう。国のため忠義を尽くし、この命を捧げようと決意している。家の整理は大概つけてきたことと思いますが、お勝手の下から吹き上げる風を防ぐ措置⁷⁾をしてこなかったのが残念です。何とかしてやるつもりでいて、つついそのまま出征してしまって、今もって気がかりであるから、太郎にでもやらせるが良い。

これに対して、地上では西郷が、一緒に作業する兵士(樫原)に言う。

こんな島、アメ公にやっちゃまえばいいんだよ。何にも生えねえし、臭えし、熱いし、虫だらけだよ。しかも水がねえ。

樫原が「この島は神聖な国土の一部やないか」と注意すると、西郷が反論する。

どこが神聖なんだよ、こんな島。いっそのこと、こんな島、アメリカにくれてやろうぜ。そうすりゃあ、家に帰れるぜ。

西郷と栗林のボイス・オーバーは極めて対照的である。栗林の兵が待つ任地では、一兵卒の西郷が、日本に残してきた妻である花子に向けて、海岸の塹壕掘りを、ここで死ぬ穴、つまり「墓穴を掘ってんのかな」と独白している。それに対して、任地を目の前にした栗林のボイス・オーバーは、「国のため忠義を尽くし、この命を捧げようと決意している」と妻に語りかける。

地上にいる西郷には、頭上にいる栗林とは違い、硫黄島での任務に殉ずるつもりはあるのであろうか。彼にとって硫黄島は、「何にも生えねえし、臭えし、熱いし、虫だらけ」の島であり、神聖な国土とは思えない。西郷は、硫黄島が戦略的にどれほど重要な位置を占めているのか、理解していないようである。こんな島は

アメリカにやっ飛ばせばいいのである。そうすれば、花子のもとへ帰れるからである。生きて妻のもとに帰る。日本軍の兵士が戦場で言ってならない本音を、西郷がもらしている。

西郷たちを指揮することになる栗林は、冷酷な軍人ではないようである。続くボイス・オーバーが、残してきた家族に対して、細やかな心遣いを示している。「お勝手の下から吹き上げる風を防ぐ措置をしてこなかったのが残念です。何とかしてやるつもりでいて、つついそのまま出征してしまって、今もって気がかりであるから、太郎にでもやらせるが良い。」栗林もまた残してきた家族のことを心配しているのである。

家族を思うことに関しては、総指揮官と一兵卒の違いはあっても、二人とも同じ人間なのである。

II

総指揮官・栗林と一兵卒・西郷は、すぐに接点を持つことになる。硫黄島に到着した栗林は、出迎えた大杉海軍少将や将校たちを従えて、休む間もなく徒歩で、硫黄島の視察に出かける。海岸では、神聖な国土である島を冒涇する発言を聞き咎めた上官が、西郷たちを鞭で打擲している。そこへ栗林が通りかかり、何をしているのか、と上官に質問する。

上官：この兵卒どもが非国民の如き暴言を吐いておりました。

栗林：きみは二人を前線から退けて、なお余りある兵を持っているのかな。

上官：いえ、持っておりません。

栗林：では、体罰はやめるように。昼飯抜きということではどうかな。良い上官は鞭だけでなく、頭も使わんと。

さらに栗林は、海岸線で兵士たちが何を造っているのか、質問して、塹壕を掘っていることを知ると、あっさり中止させる。兵士たちが塹壕を掘っているのは、ここに米軍が上陸されることが予想されるので、迎え撃つためであると説明されても、栗林は受け付けない。それどころか、兵士たちに十分な休憩を取らせるように指示する。

ここで問題が生じる。栗林が体罰を止めさせ、兵士たちに十分な休養を取らせるのは、部下思いからなのか。妻への細やかな配慮を示している「お勝手の下から吹き上げる風の措置」を思い出すと、栗林は家族に対してと同様に、兵士思いであると理解されるであろう。

しかし、「きみは二人を前線から退けて、なお余りある兵を持っているのかな」という栗林の発言からは、来るべき米軍との戦闘に備えて、一人でも多く兵力を温存することを考えての計算づくの命令であるとも理

解される。ともかく、栗林が旧来の日本軍の将軍とは異なる、合理的な思考をもった人間であることを推測させる。

栗林との最初の出会いで、西郷は彼に好感を抱くにいたる。しかし兵士たちのなかには、栗林についての噂がすでに飛び交っている。休憩中の西郷が仲間の兵士(野崎)と会話する。

西郷：栗林閣下に乾杯だ。ありゃ、いい司令官じゃねえか。

野崎：やつはアメリカに住んだことがあるそうだ。だから塹壕掘りをさせたくないんだ。メリケン好きなんじゃないか。[...] 204連隊の連中に聞いたんだが、もともと小笠原兵団長には、別の司令官が任命されるはずだったらしい。だが何とその司令官が辞退なされたそうだ。だから東条首相はかわりに栗林中将を任命されたんだそうだ。

西郷：まあ、いずれにせよ、204連隊の奴は信用できん。あいつら海軍のいきがかかってんだ。おれは栗林ってえのは、偉え司令官だと思っせ。だって見ろよ。すでにおれたち、砂場の穴掘りからは解放されてんじゃねえか。

野崎の説明にあるように、アメリカ留学経験のある栗林を煙たく思う者も、本来ならば司令官として任官するはずではなかった栗林に敬意を払わない者もいる。小笠原兵団はひとつにまとまっているわけでもなく、海軍と陸軍の対立があることもわかる。

陸軍と海軍の連携がうまくとれていないことは、栗林も司令部で伊藤海軍中尉の説明を聞いて、すぐ気がつき、「これは本物の戦なんですよ」とたしなめる。また全兵力が海岸に展開されていることに対して、武器弾薬は後方へさげることが命令し、伊藤が「先日、下ろしたばかりです」と抗弁すると、栗林は「だから戻せば良い。速やかに陸軍と連絡を取りなさい。摺鉢山の防御が第一。もうひとまわりして来る」と言って、夜になっているにもかかわらず、再び島の視察に出かける。栗林が出かけた後で、大杉と伊藤が会話する。

大杉：あれは厄介者だな。

伊藤：陸士上がりはあんなものです。

映画の展開とともに、海軍との軋轢が明らかになっていく。将官、将校のすべてが総指揮官である栗林に従っているわけではないのである。

III

栗林は米軍の侵攻に対して、如何にして硫黄島を防御するか、その作戦を立てるべく、副官の藤田を伴っ

て島内をくまなく調査して回る。島の中心部をなす集落を視察すると、数台の戦車が止まっているのが目に入る。なぜこんなところに戦車があるのかと問いただすと、藤田は、動かすには修理が必要なのでここに置かれていると答える。軍の装備が極めて不十分なのである。そのとき、軒先で玩具の戦車を手にして遊ぶ男の子が、栗林の目にとまる。その瞬間にアメリカ留学中の光景が、栗林の脳裏に浮かぶ。

栗林が街路の端に腰を下ろし、道路に停車中の自動車のスケッチをしている。息子・太郎へ絵手紙を送るためである。文面がボイス・オーバーで流れる。

太郎、アメリカは自動車がたくさんあります。道をよこぎるには、お父さんは何度も何度も注意せねばなりません。車がたくさん行きかいているからだよ。太郎、お母さんの言いつけをちゃんときいていますか。お父さんはさみしいです⁸⁾。(傍点は筆者)

硫黄島の防御作戦に腐心している最中にも、栗林の胸中から家族が去ることはない。悲哀と憂いを含んだ栗林の顔がクローズアップで映し出される。

「悲哀と憂いを含んだ」と栗林の表情を形容したが、映像作品では、すべてを台詞やナレーションによって、説明するわけではない。したがって映像を読むことが必要となる。『硫黄島からの手紙』でも、栗林と西郷のクローズアップが多用されるが、そこから何を読み取るかが、この作品では重要になる。

栗林は藤田に島民を速やかに本土へ帰すことを指示する。幼子とその家族たちを戦争の惨禍に引きずりこむことの危険を、太郎への愛が栗林に気づかせるのである。

一兵卒である西郷は、命じられた職務をこなすだけの日々を送っている。西郷の気持ちは常に花子だけに向けられている。ある日、住民たちが立ち去った集落の片付けを、西郷たちが行なっていると、一人の将校が馬を駆って、颯爽と登場する。西郷のボイス・オーバーが、この将校を花子に紹介する。(それが観客へのナレーションになっている。)

花子、この島には偉い人がいる。オリンピックの馬術で金メダルをとった西中佐って方だ。戦車26連隊の連隊長で、つい先日東京から着任された。西中佐は男前だから、女ったらしの噂がある。でもこの島にはもう口説く女が残っていない。

もう硫黄島には、兵隊以外には人間は残っていないのである⁹⁾。

西中佐と再会した栗林は、彼を夕食へ誘う。西から栗林は、連合艦隊がマリアナ沖海戦で決定的な敗北を

喫したことを知り、衝撃を受ける。西によれば、今や制海権も制空権もないのと同然であり、米軍の攻撃に対して、最も賢明な措置は、この島を海の底に沈めることなのである¹⁰⁾。あてにしていた連合艦隊はもはや頼みにはならないのである。

西が帰った深夜、栗林は一人、硫黄島の立体地図に見入り沈思する。

部下を伴って、島内を巡視する栗林が、作戦の変更を指示する。「洞窟を掘り、地下要塞を構築する。地下に潜って徹底抗戦」。これは上陸する米軍を海岸で迎え撃つ、従来の水際作戦からの転換を意味する。海軍の林少将は、栗林の思いもよらぬ作戦変更に、あきれ果て反対する。

林：水際の塹壕は第一の防衛線です。海岸の陣地なしでは勝てる戦も勝てません。

栗林：米国が一年間に生産する自動車の台数をご存知ですか。500万台だよ。彼らの軍事力と技術力を過少評価してはいかん。米軍は確実に海岸を突破してくる。兵をそこで死なせては、勝ち目はない。

海軍の林たちは、それでも海岸での防衛を放棄する、前代未聞の作戦に反論するが、栗林はマリアナ沖で連合艦隊が全滅したこと、および大本営の命令で硫黄島からすべての飛行機が引き上げられたことを引き合いに出し、彼らを説得する。海軍も最終的には栗林の命令に従い、洞窟を掘って地下に籠もり、持久作戦を取ることになるが、栗林の作戦は徹底されることなく、最後まで栗林はこれに苦しむことになる。

IV

西郷の周りで変化が起こる。硫黄島の水が原因で体調を壊していた、同僚の榎原が症状を悪化させ、命を落とす。そこへ新しい兵士が配属される。野崎の判断によれば、身分は憲兵の清水である。なぜ憲兵が西郷と野崎のいる部隊に派遣されてくるのか、と野崎は訝る。

西郷には、憲兵に対しては厭な思い出しかない。持久戦に備えるために、食料が節約され、昼食に雑草汁ばかり摂らされている西郷の目に、清水の姿が映る。西郷は野崎に過去の出来事を語り始める。

今のおれたちの働きからすりゃ、カステラとかコッペパンとか出てもいいくらいだ。おれは昔、大宮でパン屋をやったんだ。女房と二人で切り盛りしてた小さなパン屋だったけど、砂糖が入った時は、アンパンとかカステラとか作って売ってた。だけどあいつら憲兵隊が来て、ちょくちょくいろんなものを持って行きやがった。戦争のため、お

国のため。何でパン屋なんだよ。ハムサンドを置いたとたん、やつらはそれも持って行きやがった。それで最後にゃ、鉄の供出だとか言って、道具まで持って行って、それで店は仕舞いだ。

それを聞いて、野崎がしんみりと言う。

かみさん、辛かったろうな。店のだんなまでとられて。

西郷は野崎の言葉に触発されて、召集令状が届いた日のことを思い出す。国防婦人会のたすきをかけた女性たちが西郷の店を訪ねてくる。西郷は「お国のため、精一杯ご奉公に務めてまいります」と言うが、花子は「お願いします。私たち、他による術がないんです」と嘆願する。すると花子の大きくなったお腹を見て、国防婦人会の女性が「もうそんなご時世じゃないんです。私たちが夫や息子を戦争に送っております。皆自分の役目を果たさなければなりません。もう跡継ぎもいらっしやるし」と冷たく言い放つ。

ここで初めて、西郷の妻が身籠っていることが知らされる。その夜、花子が西郷に「あなたが居なくなったら、あたし、どうすればいいの。だって、一人も帰って来ないんだよ。一人もだよ。絶対に帰してもらえないのよ」と涙ながらに訴える。西郷は花子の手を握り、お腹に顔を近づけて話しかける。

おい、聞こえるか。父ちゃんだ。いいか、今から言うことは誰にも言っちゃいけねえぞ。いいな。父ちゃんは、生きて帰ってくるからな。

このシーンによって、「国のため忠義を尽くし、この命を捧げようと決意している」栗林に対して、お国のためよりも、ただひたすら、花子とこれから生まれてくる子供のために、生きようとする西郷の違いが、明確に表現されることになるのである。

V

栗林の持久作戦を遂行するための陣地構築が始まり、兵士たちは作業に励む。西も戦車をカモフラージュするのに忙しい。ただし、大杉海軍少将は「ばかばかしい。こんな洞窟掘りなどまったくの時間のむだだ」と部下の伊藤中尉に吐き捨てるように言う。伊藤は「少なくとも水際のトーチカ築城は妥協してくれましたから」と大杉を慰める。

栗林は大杉の体調不良を口実にして、彼を内地へ配置換えにする。海軍司令官の職は市丸海軍少将が引き継ぐことになる。任務を辞するにあたって、大杉は栗林に洞窟を掘ることの無駄を指摘し、「艦隊の援護なしでは、この島は5日ともちません。潔く戦って散るべ

き」であると主張する。栗林が答えて言う。

確かに洞窟にどれほどの効果があるか、分かりません。いやそもそもこの島の防衛自体、いやさらにこの戦自体、無理なことなのかもしれません。しかしだからといって、諦めるのですか。我々はこの島を死守しなければなりません。最後の一兵になるまでです。日本で我々の子どもたちが一日でも長く安泰に暮らせるなら、我々がこの島を守る一日には意味があるのです。

栗林の発言で特に注目したいのは、硫黄島を一日でも長く守る意味を、「日本で我々の子どもたちが一日でも長く安泰に暮らせる」ためだと説明していることである。西郷は妻と生まれてくる子供のために命を惜しむが、栗林は日本の子どもたち——そのなかには彼の子どもたちもいる——の平安のために命を捧げるのである。

しかし、大杉の気持ちに変化は起こらない。栗林は、硫黄島を守るために速やかに援軍を送ることを、大本営に進言してくれ、と頭を下げて頼むが、大杉は無視する。

『硫黄島からの手紙』においてここまでは、どのように米軍を迎え撃つか、その防衛に関して、従来の水際作戦にこだわる海軍と、後方に退却し、地下要塞に籠る持久戦を指示する、栗林との意見の食い違いは描かれている。しかし米軍による攻撃が描かれることなかった。その意味では、戦争の緊迫感にかけていたが、いよいよ米軍の空襲が始まる。

硫黄島は昼夜の区別なく、激しい空爆を受ける。西郷たちが籠もる地下壕内には、爆撃の轟音が響き、そのたびに地下壕が衝撃で揺れる。苛立った兵士の一人が叫ぶ。

畜生、いつまで続くんだよ。昼も夜もねえじゃねえか。毎日、毎日。おかしくなっちゃうよ。

兵士たちに動揺が見られるのに対して、栗林がひよこのスケッチを書いている姿が淡々と映し出される。そして娘のたか子への手紙の文面が、ボイス・オーバーで聞こえてくる。

たこちゃん、ちょうど二月ほど前に生まれた四羽のひよこは、とても大きくなりましたよ。毎日お母さんどり鶏に連れられて、餌を拾って食べていますが、お父さんがこの頃苦勞して作った畑を荒らして、困っています。

戦争がこれから重大な局面を迎えようとしているときに、栗林は自分の置かれた状況には何も触れず、鶏

の親子を描いている。戦況は緊迫の度合いを強めていく。しかし手紙のなかには、平安な時間が流れている。緊迫した状況には不釣り合いであるからこそ、手紙が生み出す静謐さに注目する必要がある。

そこへ、藤田が「閣下、米国艦隊がサイパンを出ました」と報告すると、明と暗、静と動の劇的な転換が行なわれる。栗林の表情が変わり、藤田に命令する。「総員、配置に着け！」来るべきものがついに来たことを知った栗林の顔が、クローズアップされる。その顔は、これから展開されるであろう戦闘を予測するかのよう、複雑な表情をしている。

VI

アメリカの巨大な艦隊が、硫黄島へ向かって進む。栗林が全軍の兵士に訓令する。

諸君、いよいよ我らの真価が問われる時がきた。日本帝国軍の一員として誇りを持って戦ってくれることと信ずる。この硫黄島は日本における最重要拠点である。もしこの島が敵の手に渡れば、爆撃の拠点となり、敵はこの地から本土へと攻撃せしめんとする。本土のため、祖国のため、我々は最後の一兵になろうとも、この島で敵を食い止めることが責務である。ものども、十人の敵を倒すまで、死ぬことは禁じる。生きて再び祖国の地を踏みしめることなきものと覚悟せよ。余は常に諸士の先頭にあり。天皇陛下、万歳！（三唱）

栗林は、硫黄島が戦略上、いかに重要な位置を占めているかを説き、本土防衛のために、この硫黄島で戦って死ぬ覚悟を求める。米軍が物量において日本軍に圧倒的に勝ることを知る栗林は、それゆえに、劣勢を跳ね返すには、日本軍の一人の兵士が十人の米兵を殺さねばならないと、およそ不可能と思われることを命じ、それまでは戦いを諦めて、潔い死を選んでほしいと、号令するのである。

生きて日本へ帰れる希望はない兵士たちにとって、栗林の命令は理不尽ではないのか。戦いの先には、死ぬことしかないのに、一人十殺を命令する栗林の胸中は、如何ばかりであろうか。栗林が訓令する言葉からは、悲壮な決意が伝わってくる。そして「天皇陛下、万歳」を三唱するときクローズアップされる栗林の顔には、「ただならぬ悲壮感が漂っている」、というような陳腐な形容では言い尽くせない異様さがある。これをどのように注釈すれば良いのであろうか¹¹⁾。

栗林は全軍の兵士に必死の覚悟を求めている。それを兵士たちはどこまで理解しているのであろうか。

栗林の対極にいるのが、西郷である。彼は妻とお腹の赤ん坊に、生きて帰ること誓った。彼は必死の覚悟ではなく、こういう表現が許されるならば、必生の決

意をしているのだ。それが洞窟内を流れる栗林の放送で打ち砕かれる。ここに、死を覚悟した栗林と生を断念せざるを得ない西郷の、凄まじい対照がある。両者のクローズアップが、その葛藤と相克を伝えている。

VII

アメリカ軍の猛烈な空爆と艦砲射撃が始まる。兵士たちは地下壕に閉じこもったままだが、壕内に置かれた便器(糞入れのバケツ)が汚物でいっぱいになる。西郷がその始末を命じられ、地下壕の外へ出ると、海上を埋め尽くす巨大な船団が見える。西郷は度肝を抜かれ、さらに艦砲射撃に驚いて、思わずバケツを落とす。バケツは崖の斜面に留まり、西郷が何とか拾い上げた瞬間に、艦砲射撃の砲弾が、すぐ近くに着弾する。しかし幸運なことに砲弾は不発で、西郷の命は助かる。

米軍の上陸が始まる。市丸少将が攻撃開始を求めるが、栗林は「浜を埋め尽くすまで、待て！」と、米兵を充分引きつけるまで、なかなか命令を出さない。ついに「攻撃開始」の命令が出され、満を持した日本軍の集中攻撃が始まる。上陸した米軍は大混乱に陥り、甚大な被害をこうむる。

栗林は緒戦としては上出来と判断する。しかし物量に勝る米軍がじわじわと反撃に転じ、摺鉢山をめぐる攻防が激しさを増す。摺鉢山からの援軍の要請に対して、栗林は援軍を送る余裕はない。西郷の隊では機関銃の弾丸が切れ、西郷が摺鉢山の本部へ弾丸をもらいに行くと、指揮官が電話で栗林に「摺鉢山は落ちました。何とぞ、武士の本懐を！」と迫っている。栗林は「だめだ！」と許さない。しかし電話を切った指揮官は栗林に従わず、西郷へ「自決だ。これを上官に渡せ！」と命令を書いた紙片を渡す。

西郷は隊へ戻り、上官に紙片を渡す。ただし西郷は、指揮官の電話から聞こえた栗林の「北部方面の部隊と合流する」という命令を伝えるが、上官は取り上げない。

退却など、卑怯者のすることだ。潔い死にざま。靖国に御魂となって帰る。靖国で会おう。天皇陛下、万歳！

潔く死ぬことは、すでに大杉海軍少将が栗林に進言していたが、戦況が不利になってくると、隊を指揮するものたちは、部下の兵士たちに潔い死に様、つまり自決を求める。しかし上官と違い多くの兵士たちは、死にたくはないのだ。上官に見張られて、彼らはためらいつつも、仕方なく次々に——そのなかには、西郷の親友ともいえる野崎もいる。彼は泣きながら——手榴弾で自決する。

清水と西郷は自決をためらう。上官が拳銃で自決すると、西郷は走り出す。清水が拳銃を構えて、自分は

できなかつたにもかかわらず、「自決すべきだ」と迫る。西郷は北部方面に合流することを主張し、「ここで死ぬのと、生きて戦い続ける。どちらが陛下のためになる」と清水を説得する。死にたくはない清水は、西郷の意見に従う。

上官の命令に従わず、自決しなかつた西郷と清水は、伊藤海軍中尉が指揮を取る部隊にたどり着くが、二人を見た伊藤は抜刀し、摺鉢山からの退却などあり得ない、逃走してきたとして、二人の首を刎ねようとする。その瞬間に、戦況を把握するために司令部を出て、移動中であつた栗林が姿を現し、「北部方面へ合流するように命じたのはこの私だ」と言って、伊藤を制止する。伊藤は栗林の制止を受け入れるが、「摺鉢山は落ちました」と報告する。栗林が摺鉢山へ目を転じると、頂上に敵の旗が翻っている。栗林は伊藤に最後まで戦うことを命じて去る。

しかし栗林の命令は徹底されない。林海軍少将が総攻撃の指令を出す。西郷と清水は眠っているところを起こされ、総攻撃隊への合流を命じられる。西郷は栗林が洞窟で待機するように指示したと抗弁するが、総攻撃に加わる兵士は、「栗林閣下は腰抜けで、アメリカの腰巾着だと伊藤中尉が言っておられた」と、取り合わない。だが彼らは出撃するも米軍の攻撃が激しく、一旦は地下壕へ戻る。

もはや日本軍は総指揮官である栗林の命令のもとに、統率されてはいないのである。林少将の総攻撃を撤回する栗林の命令が、全軍に伝わらなかつたために、千鳥飛行場への斬り込みで1000名の兵士を失つたことが、副官の藤田から報告され、栗林は激怒する。

貴重な戦力を失つて困惑する栗林のもとに、大本営からの電報が届き、追い討ちをかける。

戦局ここに至りては友軍を硫黄島へ派遣することは困難なり。小笠原兵団は最後まで敢闘し、悠久の大義に生くるべし。

栗林は軍備においても、兵力においても圧倒的に不利な状況に追い込まれ、ついには大本営から見捨てられる。しかしそれでも、栗林は硫黄島を死守するために指揮を続ける。栗林の顔のクローズアップが孤軍奮闘する総指揮官の苦悩を表現している。

VIII

西郷は生き残るために、清水に「投降する」と告白する。そして清水も捕虜になつた米兵の死を目の当たりして、「無駄死に」するのではなく、投降することを決意する。二人は部隊を抜け出すことにし、まず清水が先に行くことになる。清水は監視の眼を逃れ、命からがら投降して捕虜になる。そこにはすでにもうひとりの投降兵がいるが、彼らを見張るように命じられた

米兵によって、「ついてない。敵の標的になる」として、二人は射殺されてしまう。清水は投降したのに、生きることはできなかつたのである。

清水と約束したとおりに投降をすることができなかつた西郷は、他の兵士たちと米軍の攻撃をくぐり抜けて、栗林のいる本部壕にたどりつく。栗林は彼らの労をねぎらうが、水を与えたくても、与える水がない。栗林が西郷を見て、「君は見覚えがあるな。首を斬られそうになつた」と話しかける。西郷が「あの時、助けていただいたのは、二度目でした」と答えると、栗林は「二度あることは三度あるかもな」と言う。

西郷は花子への手紙を書く。

花子、この手紙が届くことはないだろう。でも書いているってことで落ち着く。もう五日も飲まず、食わず。ただ生きるってためだけに信じられねえことまでする。もう逃げらんねえ。でもお前と赤ん坊のことだけが気がかりだ。

届かないと分かっている手紙でも、手紙を書くことで、西郷の精神の平静さは保たれる。ここに手紙を書く意味がある。その意味では栗林も同じなのであり、この点に西郷と栗林の共通点がある。

そのとき、藤田が西郷に「ミミズを取って来い」と命令する。総指揮官である栗林が食べるものさえ、もはやないのだ。

栗林は大本営へ訣別文を書く。

戦局最後の関頭に直面せり。今や弾丸尽き水涸れ、全員反撃し最後の敢闘を行わんとするにあたり、ひたすら皇国の必勝と安泰を記念しつつ永へにお別れ申し上げ。国の為 重きつとめを 果たし得て 矢弾尽き果て 散るぞ悲しき。

西郷が栗林にミミズを届け、二人の会話が始まる。

栗林：君は摺鉢山からだったかな。ずいぶん大変だったろう。立派な軍人だ。

西郷：自分はただのパン屋であります。

栗林：そうか、家族は？

西郷：大宮に家内と去年の夏生まれた娘がいます。まだ顔はみていませんが。

栗林：不思議なものだな。家族のためにここで死ぬまで戦いぬくと誓ったが、家族がいるから、死ぬことをためらう自分も。

栗林がこれから総攻撃をかける総指揮官としては、口に出してはならない、胸中の思いを西郷に明かしている。「家族がいるから、死ぬことをためらう」自分がいると。

栗林は身辺整理をした後で、西郷に「この書類すべてと私の軍用行李を燃やしてほしい。二度あることは三度あるだ」と指示する。それは司令壕に残ることを意味し、西郷が総攻撃に加わるのではなく、死を免れることを意味している。

洞窟の外に出た栗林は、総攻撃に臨む兵士たちに最後の訓令をする。

今より総攻撃をかける。日本が戦に敗れたりといえども、いつの日か国民が諸君らの勲功を称え、諸君らの霊に涙し黙祷を捧げる日が必ずや来るであろう。安んじて国に殉ずるべし。余は常に諸士の先頭にあり。

訓令する栗林と、書類を燃やす西郷の交互カットが続く。そして栗林は総攻撃で負傷し、西郷は地中に袋を埋める。

負傷した栗林は、藤田に「ごくろうだったな」と言っ、藤田に斬首を命じる。藤田が軍刀を振りおろそうとした瞬間、米兵に狙撃され絶命する。シャベルを持った西郷が栗林を発見し、栗林は「埋めてくれ、誰にも見つからぬようにな」と西郷に頼む。栗林はそう言っ、海の方を見る。その遙かかなた先にはアメリカがあるであろう。アメリカをドライブしている栗林の自動車から見える光景が、海とオーバーラップする。栗林がアメリカ留学から帰国する際に、アメリカを一人でドライブした光景にタイムスリップする。自動車の助手席には、送別パーティで贈られた拳銃・コルトが入ったケースが置いてある。栗林のボイス・オーバーが聞こえる。

太郎、もうすぐ帰ります。日本に帰れるのはうれしいですが、友人たちとお別れするのは少しかなしく思います。運転して帰りました。でも一人ぼっちのドライブはさみしいもんです¹²⁾。(傍点は筆者)

栗林が運転する自動車が道路のかなたに消えて行き、硫黄島の海にオーバーラップする。

栗林はコルトを手にする。栗林が西郷に「ここはまだ日本か？」と聞き、西郷が「はい、日本であります」と答える。栗林はコルトで自決する。西郷の目から涙がこぼれる。総指揮官の最期を見届けたのは、一兵卒の西郷だったのである。彼は死体を引きずって行き、どこかに埋葬する。

米兵たちが藤田の死体を発見する。兵の一人は藤田の軍刀を手に入れ、別の兵はその場に残されたコルトを拾い上げ、腰のベルトに挿す。埋葬から戻った西郷は、米兵が栗林のコルトを腰に挿しているのを見て、狂ったように暴れだすが、頭をライフルの銃床で殴ら

れ気絶する。

西郷は担架で海岸へ運ばれ、負傷した兵士たちの担架が並んでいる列の中に置かれる。意識が戻った西郷が目を開けると、海に没する赤い夕日が見える。栗林は国に殉じて命を捧げたが、西郷は妻と赤ん坊への約束を果たし、生き残ったのである。

映画のエンディングは、オープニングの調査隊の発掘現場に戻る。隊員たちはひとつの袋を掘りあてる。西郷が埋めた袋である。かれらは慎重に掘り出すが、持ち上げられた袋から、届けられることのなかった大量の手紙や葉書がこぼれ落ち、宙に舞う。ボイス・オーバーで、日本へ届くことがなかったそれらの文面が、それを書いた兵士たちの様々な声で読まれる。

硫黄島(米軍の上陸地点となった海岸と前方の摺鉢山)が黒くシルエットで映し出され、オープニングに対応した映像になり、エンディングとなる。

結

日本国の本土をアメリカ軍の攻撃から守るために、硫黄島の戦闘を指揮した総指揮官である栗林忠道陸軍中将与、一枚の召集令状によって、身重の妻を残して、行きたくもない戦場へ駆りだされた一兵卒の西郷の二人は、立場の違いはあれ、家族を愛する気持ちでは同じであった。

しかし彼らの愛の方向は正反対であった。

栗林は死を選んだ。彼が自分の命はもちろん、部下の兵士たち全員の命を犠牲にするには、大義があった。それは国防上の最重要拠点である硫黄島を一日でも長く死守することが、日本の子どもたち(そして栗林の子どもたち)が一日でも長く安泰に暮らすことができるためであったからである。

西郷には大義はなかった。彼にあるのは、死にたくない、生き残りたいという、言ってみれば、エゴイズムである。自分が生きて帰るためには、極論すれば、硫黄島など、どうでもいいのである¹³⁾。西郷が死んでしまえば、彼のほかには頼る者がいない、妻と生まれるであろう(そして生まれた)赤ん坊は、どう生きていけば良いというのか。彼は家族ために死ぬことはできないのであり、米軍への投降さえ考える。西郷は家族を守るために、とにかく生き残ろうとした。

総指揮官と一兵卒が示している、この両極の間に、硫黄島のすべての兵士が存在していた。『硫黄島からの手紙』は、複雑で多面性をもった栗林と生きることへのひたすらな欲望をもった西郷という、ふたりの人間をふたつの核として、彼らにまつわる人物をその周辺に配して、硫黄島で戦った将兵たちの人間ドラマを見事に描きだしていると言えよう。

このような映画を、日本人ではない、クリント・イーストウッドが監督したことは驚くべきことであり、

高く評価されるべきであろう。実際に日本において『硫黄島からの手紙』は、『キネマ旬報』の外国映画のベストテン第2位¹⁴⁾に選出されるなど、作品にふさわしい評価を得ている。

しかしそれにもかかわらず、この映画には、なにか違和感を覚えるのである。

栗林中将のような人間味に溢れ、合理的な思考を持ち合わせた指揮官は、思考が硬直し、部下に対して残忍な、これまでの日本の戦争映画にありがちな戦争指導者像と比較すれば、類型化を免れていて、魅力的であるが、それゆえに、栗林の持久作戦が全軍に貫徹されていたならば、硫黄島の戦闘は異なった結末を迎えていたであろう、と観客に想像させるおそれがあるのではないか。アメリカ軍により大きな犠牲者を生みだし、場合によっては……と妄想する観客がいるかもしれない。しかし、それは兵士たちにどのような結末をもたらすことになるのか。一人十殺を命じ、それまでは死ぬことを許さない、栗林の命令が貫徹されていたならば、兵士たちは死ぬことも許されない、血みどろの戦いの果てに、精根尽きた地獄の亡者として無惨な死を迎えるだけであろう。あまりにもむごい死にぎまめであると言わざるを得ない。

西郷は何としても死にたくはなかった。西郷のほかにも、死にたくはない兵士はいた。野崎は上官に強制されて自決しなければならなかったし、投降した清水は、あろうことか、米兵によって射殺されてしまう。口にこそ出さないが、死にたくはない、たくさんの兵士がいたのである。『硫黄島からの手紙』は、生きたいのに、死なざるを得なかった、これらの兵士たちの無念さをつかまえて、それを解き放つことができたのであろうか。映画のエンディングで、届けられることのなかった無数の手紙や葉書きに書かれた文面が、それらを書いた兵士たちの様々な声で読まれる。しかしこれらの無念さは、そんなことで解き放たれたのであろうか。

このように考えてくると、『硫黄島からの手紙』への違和感がしだいに膨らんでくるのである。イーストウッドの制作意図に対しては、的外れの指摘であるかもしれない。しかし、『硫黄島からの手紙』が公開される前に放送されたNHKスペシャル「硫黄島玉砕戦～生還者61年目の証言」(2006年8月7日)での証言や、このドキュメンタリーで証言した秋草鶴次の『十七歳の硫黄島』などを読むと、これは違和感などという言葉では、簡単に片付けられない問題であることが明らかになってくる。

ただしそれは考察する範囲を、作品外へと広げることでもある。そのためには、さらに多くの紙幅を必要とすることになるので、これは予備的考察にとどめ、別の論文をもってさらに考究することにする。

《参考文献》

- ・吉田津由子・編『「玉砕総指揮官」の絵手紙』 2002年4月 小学館文庫
- ・栗林忠道 半藤一利・解説『栗林忠道 硫黄島からの手紙』 2009年8月 文春文庫(単行本 2006年 文藝春秋)
- ・梯久美子『散るぞ悲しき 硫黄島総指揮官・栗林忠道』 2008年8月 新潮文庫(単行本 2005年7月 新潮社)
- ・梯久美子『硫黄島 栗林中将の最後』2010年 文春文庫
- ・堀江芳孝『闘魂 硫黄島』 2005年3月 光人社NF文庫(単行本 1965年3月 恒文社)
- ・橋本衛他『硫黄島決戦』2001年 光人社NF文庫
- ・R.F.ニューカム『硫黄島 太平洋戦争死闘記』 2004年8月 光人社NF文庫(単行本 1966年5月 弘文堂)
- ・武市銀治郎『硫黄島 極限の戦場に刻まれた日本人の魂』 2001年12月 大村書店
- ・NHK取材班『硫黄島玉砕戦 生還者たちが語る真実』 2007年7月 日本放送出版協会
- ・秋草鶴次『十七歳の硫黄島』 2006年12月 文春新書
- ・秋草鶴次『硫黄島を生き延びて』 2011年2月 清流出版
- ・平川二郎『もうひとつの硫黄島 そして父の手紙と母の日記が残った』 2010年9月 光工業写真
- ・J.ブラッドリー／R.パワーズ 島田三蔵訳『硫黄島の星条旗』 2002年2月 文春文庫
- ・James Bradley with Ron Powers: *Flags of our fathers*. Bantam movie tie-in mass market edition/September 2006
- ・NHKスペシャル「硫黄島玉砕戦～生還者61年目の証言」(2006年8月7日放送)

《使用したDVD》

クリント・イーストウッド監督『硫黄島からの手紙』特別版 ワナー・ホーム・ビデオ 2007年

《注》

- 1) 使用したDVDのメイキングより。
- 2) 戦闘犠牲者とは、戦死者と戦傷者の両方を含む。アメリカ軍の戦死者は約6,000人である。
- 3) ブラッドリー、405-406頁。
- 4) 武市、32頁
- 5) 使用したDVDのメイキングより。
- 6) 栗林の硫黄島への任官は1944年6月だが、米軍の上陸は1945年2月19日である。そして、栗林が最期の総攻撃を前にして、大本営に訣別電報を送ったのは3月17日であり、実際に総攻撃をおこなったのは3月26日であると言われている。しかしこの映画には、「1944年」のキャプションが出た後には、時間の経過を示すキャプションがない。5日間で陥落すると言われた硫黄島を、36日間も持ちこたえさせたことが、観客に伝わらないのは、過酷な持久戦であったことを、表現するためには致命的である。それにもかかわらず、時間経過を示さないのは、意図的であると判断される。
- 7) 「お勝手の下から吹き上げる風を防ぐ措置」については、栗林の人柄を偲ばせるエピソードとして、有名であり、R.F.ニューカム(1966年)も引用(71頁)している。
- 8) 注の12)を参照。
- 9) 硫黄島では沖縄と異なり、民間人の犠牲がなかったことを意味する。実際には、軍に必要な男たちは残された。
- 10) 『闘魂 硫黄島』(1965年)に、著者である堀江芳孝(当時は派遣参謀)は、硫黄島を沈めることを栗林に進言したと書か

いている。このシーンでの、西の発言はすべて堀江の著書に認められる。

- 11) 日本軍は米軍との戦闘において、水際作戦に失敗し、万歳突撃と呼ばれる総攻撃を敢行し、散華していったのである。それは日本軍の指揮官たちからすれば、潔い死に様であったろうが、待ち構える米軍にとってみれば、銃弾の餌食が飛びこんでくることであり、万歳突撃は、自軍の犠牲者を最小限に抑える、いわば歓迎すべき攻撃だったのである。だから、栗林は水際作戦を変更して、兵士たちを後退配備して、もぐらのように地下壕に籠もらせ、出血持久戦に持ちこむのであった。それは潔い戦いとは言い難いものであった。しかし、圧倒的な物量を有する米軍との戦闘を一日でも長く引き延ばすためには、それしかなかったのである。硫黄島の戦闘について書かれた多くの書籍が、栗林の戦闘方針に関して、上述のように説明している。そして、それを理解したうえで、米軍との戦いを目前にして、全軍に訓令する、この場面の栗林について、傍点付きで強調して、例えば、以下のように注釈することもできるだろう。
- 「およそ不可能と思われることを命じざるを得ず」、「潔い死を選んではならないと、心を鬼にして号令する」、「生きて日本へ帰れる希望はない兵士たちにとって、それでも生き

延びて戦えと命令することの理不尽さを栗林は自覚している」、「死ぬことしかないのに、それを理解した上で、訓令する栗林の胸中」。

- しかし、このように注釈してしまうと、栗林に対して、あまりにも好意的な理解を示すことになってしまうのではないかと危惧される。
- 12) 太郎への手紙に、「さみしい」という形容詞が二度登場する。これは『「玉碎総司令官」の絵手紙』の原文にはない表現であり、脚本によって、意図的に付加された言葉であることは明らかである。兵士たちに一人十殺を命じた総指揮官が、「さみしい」と繰り返して言う。それによって、栗林の人間像の陰影が深められるが、その適否については問題としなければならない。
- 13) 「どうでもいい」とは、乱暴な言い方である。硫黄島で配備についているうちに、この島を死守することが持つ極めて重要な意味を、西郷も理解していったはずである。しかし、それが彼の口をついて出ることはない。
- 14) 『キネマ旬報』の2006年度・外国映画のベストテン第1位も、クリント・イーストウッドの『父親たちの星条旗』である。